

Oriental Porcelains Found in Antigua Guatemala

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36920

アンティグア・グアテマラ出土の東洋磁器

野上 建紀

(有田町歴史民俗資料館)

はじめに

アンティグア、正式な名称はアンティグア・グアテマラである。「古い」という意味のその名が示すとおり、二百年以上、グアテマラの首都として栄えた古都である(図1・2)。かつてこの街は大きな不幸に見舞われた。1773年のサンタマルタ大地震がこの街を廃墟に変えてしまったのである。現在も静かな街中には廃墟となった教会や修道院などがそのまま残されており、往時の繁栄を偲ばせる(図3)。中米諸国の中で最もコロニアル建築が良好な状態で残る町のひとつであり、1969年に施行された文化財保護法によって景観が保護されており、さらに1979年にはユネスコの世界遺産にも登録されている。

本論は、太平洋の波濤を越えて、廃墟となったこの街の人々のもとにもたらされていた東洋磁器について、出土した考古資料から考えるものである。特にこれまでほとんど明らかにされていない日本磁器、すなわち有田焼のグアテマラ輸出について考える。グアテマラから出土した東洋磁器を最初にまとめた形で紹介したのは、アメリカの東洋美術研究者のジョージ・クワヤマ博士らである。本論でも紹介するサント・ドミンゴ修道院やサン・フランシスコ修道院から出土した中国磁器を紹介したものである[Kuwayama and Pasiński 2002]。続いてルイス・ロメロがサント・ドミンゴ修道院出土の陶磁器について、イベリア半島産、新大陸産、東洋産などの産地別に分類して発表している[Romero, Luis A. 2007]。一方、クワヤマ氏がグアテマラ出土の中国磁器として紹介している陶磁器の中に有田焼が含まれていることを筆者が氏に指摘したのは2006年のことであった。それが縁となり、その夏、クワヤマ氏と筆者は共同でメキシコ出土の陶磁器について調査を行った。さらに2010年に有田で開催された国際シンポジウム『世界に渡った肥前陶磁』の資料集にグアテマラ出土の陶磁器について概要の掲載を依頼した[クワヤマ2010、筆者訳]。

そして、筆者は2006年以来、2009、2010年にメキシコ国内出土陶磁器調査を行い、これまで200点以上の有田焼の陶片を確認している[野上2010]。おそらくグアテマラでも詳細に調査を行えば、有田焼はさらに発見されるであろうという予測をもって、2012年8月から9月にかけて、グアテマラに渡った。その際、グアテマラの文化スポーツ省文化自然遺産副省と交流協定を結んでいる金沢大学国際文化資源センターの中村誠一教授とカウンターパートのアレックス・ウリサル氏(Alex Urizar)による調整の協力と援助を受けることができた。この協力と援助がなければ、調査は実現しなかったと思う。そして、調査の結果、アンティグア出土の東洋磁器を概観することができ、また、予測にたがわず、有田焼の破片を数多く発見することができた。

I. ガレオン貿易と東洋磁器

近世の日本は、いわゆる鎖国政策がとられていた。唯一の海外貿易港の長崎に入ることが許された外国船は、オランダ船と中国船だけである。一方、マニラからメキシコのアカプルコへ太平洋を渡っていた船はスペイン船である。そもそもスペイン船はどのようにして有田焼を手に入れることができたのか、そうしたことも含めて、ガレオン貿易と東洋磁器の関係について簡単に述べることにしよう。

ヨーロッパ世界のアジアの産物への渴望は、大航海時代をもたらした。その先鞭を担ったのはイベリア半島の海洋国家であり、具体的にはポルトガルとスペインであった。ポルトガルはアフリカの喜望峰を回ってインドに到達し、その指先は極東の日本にまで及び、キリスト教と鉄砲をもたらした。一方、スペインは西へと向かった。アメリカ大陸を「発見」し、太平洋を渡り、アジアに到達した。1571年にはフィリピンのマニラを建設し、マニラとアカプルコを結ぶマニラ・ガレオン貿易ルートが開設された。



図1 グアテマラ位置図



図2 アンティグア・グアテマラ位置図

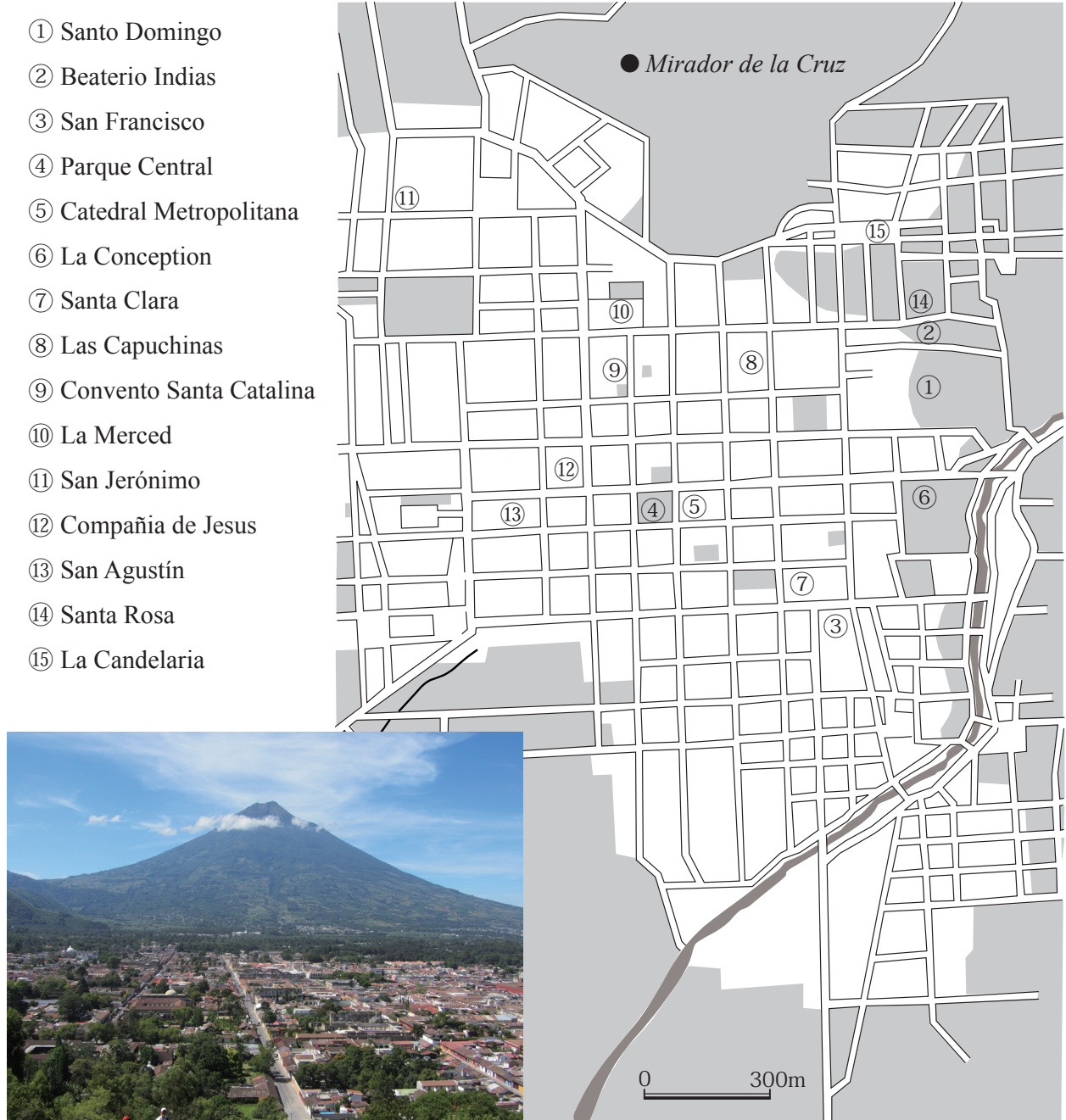


図3 アグア火山とアンティグア・グアテマラ風景および市街地図



図4 サント・ドミンゴ遺跡



図5 ベアテリオ・インディアス遺跡

マニラに中国の絹や陶磁器を持ち込んでいたのは中国商人であった。マニラのスペイン人は彼らから商品を購入していたのである。マニラに輸入された東洋磁器はマニラでも消費されたが、ガレオン船に積載されて、マニラからアカプルコまで運ばれるものもあった。アカプルコに運ばれた東洋磁器はラテンアメリカ各地のスペイン植民地に運ばれ使用された。その中にはさらに大西洋を渡って、スペイン本国に運ばれるものもあり、それは壮大な陶磁の道であった。

17世紀前半までマニラには中国磁器が大量に持ち込まれていたが、17世紀中ごろに明から清への王朝交代に伴う中国国内の混乱や清による海禁政策によって、中国磁器の海外輸出が一時激減した。清に抵抗を続けていた鄭成功一派は中国磁器を輸出できない分、日本磁器を東南アジア各地に運ぶようになった。その輸出先の中にはマニラも含まれていた。そのため、17世紀後半の清の海禁政策下では日本磁器もマニラ経由でアメリカ大陸に運ばれていたのである。

17世紀末に鄭氏一派が降伏し、清が展海令を公布して海禁政策を撤廃すると、中国磁器の再輸出が本格化し、マニラに日本磁器を持ち込んでいた中国船ももっぱら中国磁器を扱うようになった。しかし、やがてスペイン以外のヨーロッパ諸国も太平洋に進出し、太平洋貿易はスペインが独占できる状態ではなくなり、ガレオン貿易は19世紀初頭に終焉を迎えることになったのである。

II. サント・ドミンゴ修道院跡とベアテリオ・インディアス遺跡の概要

スペイン人の征服者ペドロ・デ・アルバラードは、1523年にメキシコシティから進軍し、1524年にグアテマラの地を征服した。彼は1527年にグアテマラ総督に任じられるが、その後もペルー、ホンジュラス、香料諸島、メキシコなどへ遠征を繰り返した。

アルバラードはマヤのカクチケル人の都イシムチェにサンティアゴ・デ・ロス・カバリェロス・デ・グアテマラ市を建設した。さらに1527年には弟ホルヘ・デ・アルバラードによって、アグア火山山麓地アルモロンガに新たにサンティアゴ・デ・グアテマラ市が建設されたが、1541年のアグア火山の噴火に伴う土石流によって都市は壊滅してしまった。そして、現在のアンティグア・グアテマラの地にサンティアゴ・デ・グアテマラ市が建設されて首都となったのである。しかしながら、そのアン

ティグア・グアテマラも1717年に起きた地震で甚大な被害を受け、さらに1773年の大地震では壊滅的な被害を受けた。その後、1776年にスペイン国王の命により現在のグアテマラシティに首都が移された。まさに災害に追い立てられるように首都が移転していったのである。

このように首都は転々としたが、ガレオン貿易で盛んに陶磁器がラテンアメリカに運ばれていた時代の首都がアンティグアであり、日本磁器が大量に海外に輸出していた時代に首都であった町もまたアンティグアであった。

現在のアンティグアには1773年の大地震などで廃墟となった教会や修道院が数多く残る。今回、紹介するサント・ドミンゴ修道院跡やベアテリオ・インディアス遺跡以外にもサンフランシスコ修道院、大聖堂(カテドラル)、サンタクララ修道院、カプチナス修道院、サン・アグスティン教会、イエズス会、サンタ・ロサ教会、カンデラリア教会など数多くの教会や修道院の遺構が廃墟のまま残されている。おそらく多くの東洋磁器が廃墟に眠っていることと思われる。

今回、調査を行ったのは、サント・ドミンゴ修道院跡(図4)、ベアテリオ・インディアス遺跡(図5)の2箇所から出土している東洋磁器である。そこでサント・ドミンゴ修道院跡とベアテリオ・インディアス遺跡の概要を述べる。

1. サント・ドミンゴ修道院跡

アンティグアの市街地の東部に位置している。当初、ドミニコ会はシウダ・ビエハに修道院を設立したが、後にアンティグアに移した。そして、1666年に教会が落成している。新世界で最も大きな修道院の一つとなり、壮麗な大建築を誇ったが、地震によって廃墟と化した。現在は敷地内にホテル・カサ・サント・ドミンゴが建てられており、遺跡公園、博物館を併設している。

1989～1990年と1994～1998年に現地フィールド調査が実施され、2002年に出土遺物の調査が始められ、完了している。

今回、中国磁器258点(破片数、以下同)、日本磁器33点、ヨーロッパおよびアメリカ産陶器の写真撮影を行った。内、中国磁器89点、近世日本磁器33点、ヨーロッパおよびアメリカ産陶器7点の実測図を作成した(図6～9、図11-1~6、8-12、14-26、図12)。

2. ベアテリオ・デ・インディアス遺跡

ベアテリオ・デ・インディアス遺跡は、ラス・ベアタス・インディアス通り(あるいはルビア通り)を挟んでサント・ドミンゴ修道院跡の北側に隣接している。遺跡の北側にはサンタ・ロサ教会がある。2004～2005年にかけて発掘調査が行われている。現地は調査当時のまま残されており、地表に遺構が露出している。調査が完了しているようには見えないが、調査を再開する計画はないという。

今回、中国磁器47点、近世日本磁器3点、近代日本磁器2点の写真撮影を行った。内、中国磁器11点、近世日本磁器3点の実測図を作成した(図10、図11-7、13)。また、ヨーロッパ産やメキシコ産、地元産の陶磁器が多数見られ、これらは発掘調査現場の表面でも容易に確認することができる。

Ⅲ. アンティグア・グアテマラ出土の東洋磁器

アンティグア・グアテマラから出土している東洋磁器は、中国磁器と日本磁器があるが、現地では中国磁器と日本磁器の区別はされておらず、全て東洋磁器の資料として一括して扱われていた。また、陶器を含めて、アジアのその他の地域の陶磁器は確認されていない。もともと時間的な制約から磁器を中心とした調査であったため、今後、発見される可能性はあるであろう。少なくとも磁器以外でアジアの陶磁器として初期分類されている資料は存在しなかった。

中国磁器と日本磁器に分けて主なものを紹介していきたいと思う。

1. 中国磁器(図6~10)

アンティグアで出土している東洋磁器の大半は中国磁器である。生産年代も幅広い。生産窯は景德鎮、福建諸窯(漳州窯系、徳化窯系)である。16世紀後半～18世紀にかけてのものである。ここでは便宜的にⅠ期(16世紀中頃～後半)、Ⅱ期(16世紀末～17世紀前半)、Ⅲ期(17世紀後半～18世紀前半)、Ⅳ期(18世紀中頃以降)に分けて、説明する。

Ⅰ期

図10-1は見込みが盛り上がった饅頭心の染付碗である。景德鎮産であり、見込みには花唐草文が入る。図6-1は染付折縁大皿である。景德鎮産である。折縁部には唐草文が入り、外側面には篋削りによる鐳が入る。

Ⅱ期

図6-4は染付鹿文皿である。図6-5は染付折縁皿である。景德鎮産である。縁部に宝文が入る。ヴィツテ・レウ号引揚資料に類例が見られる[Piji-Ketel(ed.)1982: p.190]。図6-7~12などは染付芙蓉手皿である。景德鎮産である。いわゆるカラックとよばれるものである。図6-13は染付柳下人物文皿である。景德鎮産である。図6-15は染付輪花折縁皿である。景德鎮産である。裏面の文様はヴィツテ・レウ号引揚資料に同様のものが見られる[Piji-Ketel(ed.)1982: p.192]。図7-3は染付鉢である。景德鎮産であり、芙蓉手文様が入る。図7-10は染付花唐草文碗である。景德鎮産であり、外面、見込み、口部内側に花唐草文様が入る。図7-12~17は染付瓶である。景德鎮産である。芙蓉手文様が入る。図7-20は色絵合子(蓋)である。図7-21~27は染付皿である。漳州窯系である。図7-22~24は底部内無釉で、砂が付着するものも見られる。

Ⅲ期

図8-1は染付花籠文皿である。見込みに花籠文を描き、内側面には花卉状に区画された中に草花文が入る。高台内には二重圈線内に宝文が入る。図8-4は染付芙蓉手皿の口縁部である。景德鎮窯系である。ベトナム沖のカマウ沈没船引揚資料の中に類例が見られる[Nguyen Dinh Chien. 2002]。図8-8~10は色絵皿である。景德鎮産であり、図8-8、10はいわゆるチャイニーズイマリとよばれるものである。図8-16は染付唐草文碗である。景德鎮産である。図8-18は褐釉掛染付碗である。いわゆるバタヴィアンウェアとよばれるものである。図8-19は染付唐草文チョコレートカップである。口鏝が入る。碗礁1号沈船遺跡から類品が出土している[碗礁一号水 underwater archaeology team 2006]。図8-20は染付唐花唐草文碗である。同様の唐花文を描いたチョコレートカップも見られる。同様の文様の製品はメキシコのテンプロマヨール遺跡でも出土しており、碗礁1号沈船遺跡の出土品にも見られる[碗礁一号水 underwater archaeology team 2006]。いずれも景德鎮産である。図8-24は染付寿字散し文碗である。底部内面無釉である。福建産の粗製のものである。メキシコシティでも出土が確認されている。図9-1~6、図10-9~11は色絵チョコレートカップである。景德鎮産である。図9-1はいわゆるチャイニーズイマリと称されている。図9-3はいわゆる豆彩であり、景德鎮産である。図9-5、10-9は褐釉掛分色絵チョコレートカップである。

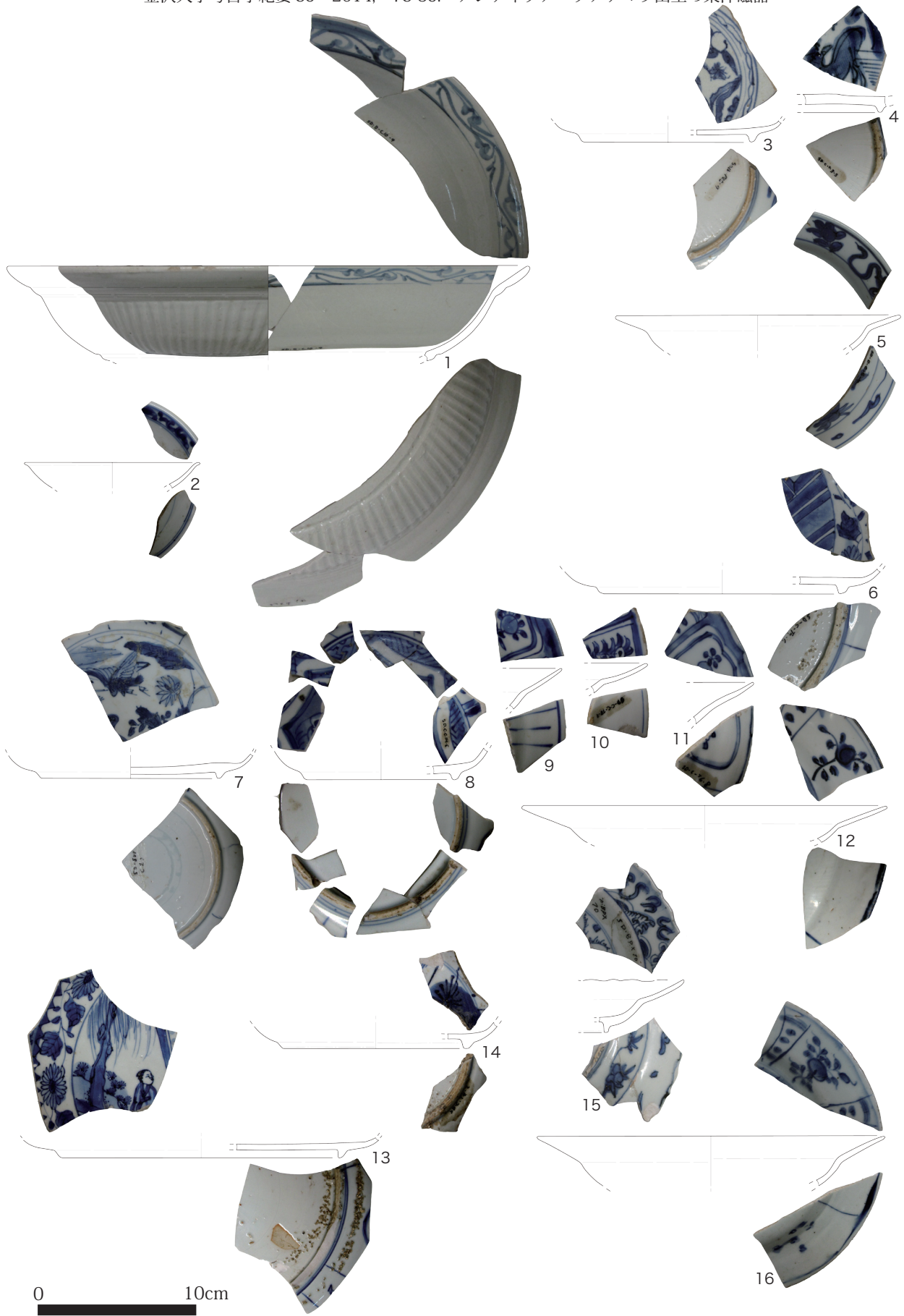


図6 サント・ドミンゴ修道院跡出土中国磁器(1)
(Courtesy:El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo)

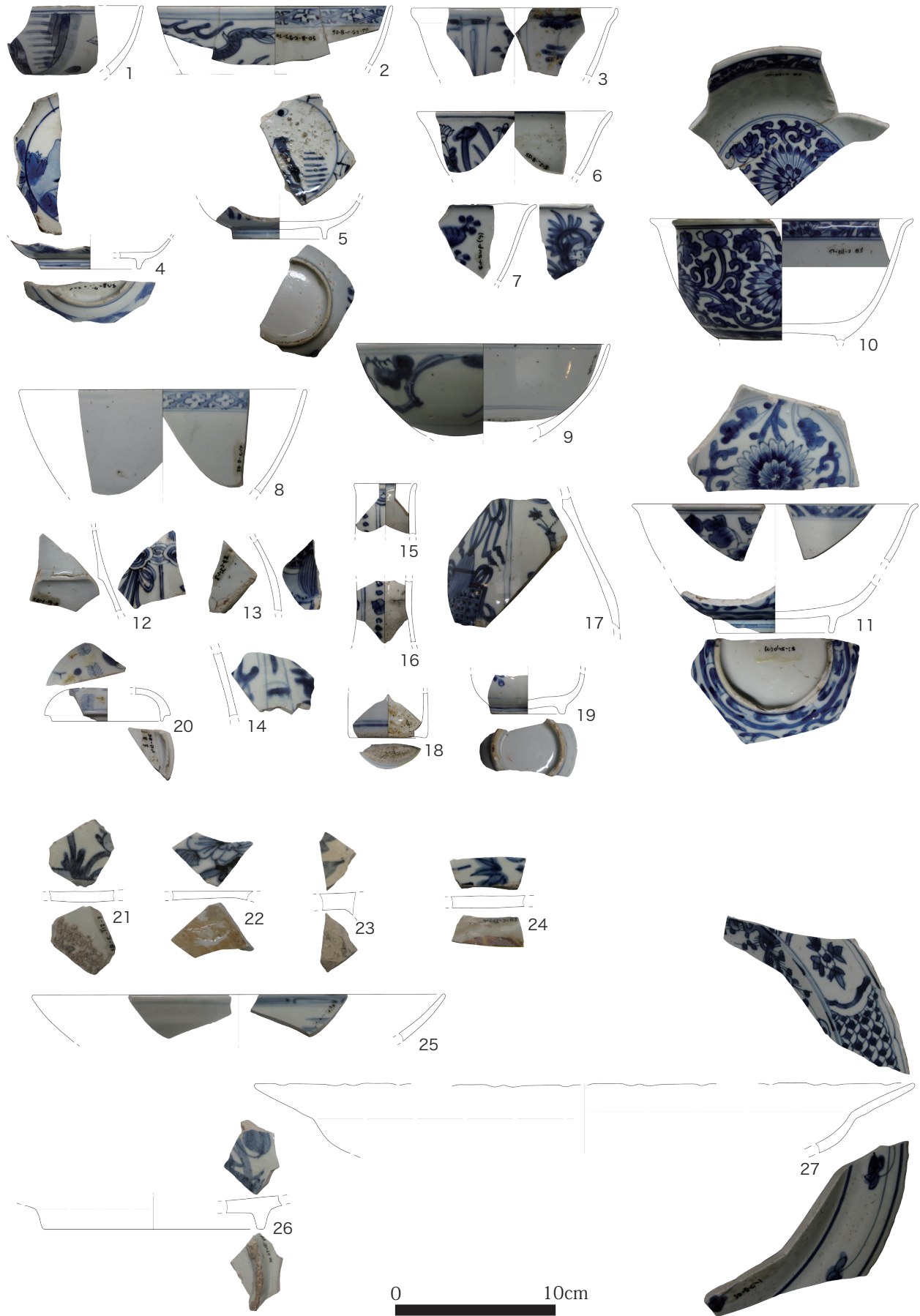


図7 サント・ドミンゴ修道院跡出土中国磁器(2)
(Courtesy:El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo)

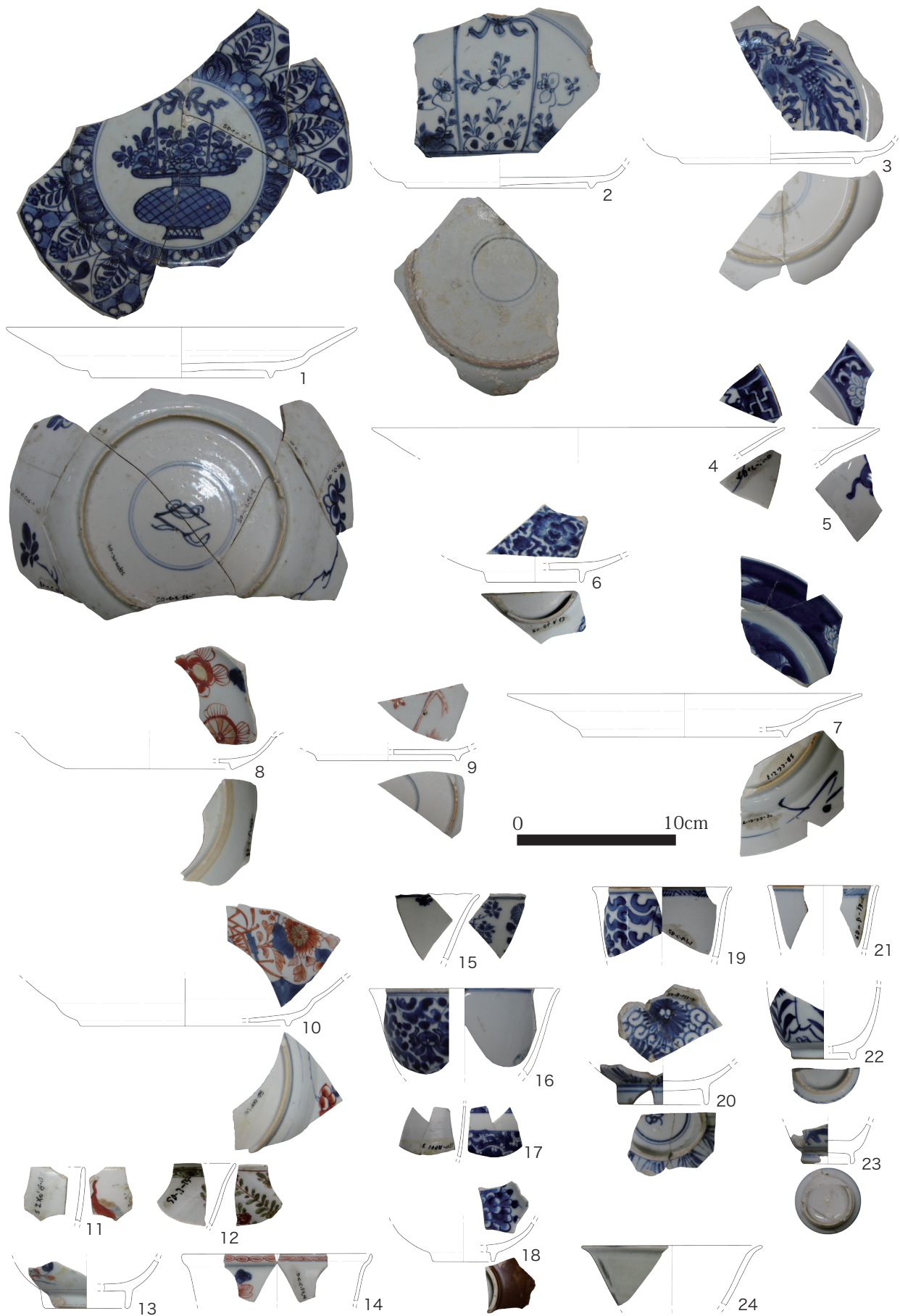


図8 サント・ドミンゴ修道院跡出土中国磁器 (3)
 (Courtesy:El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo)

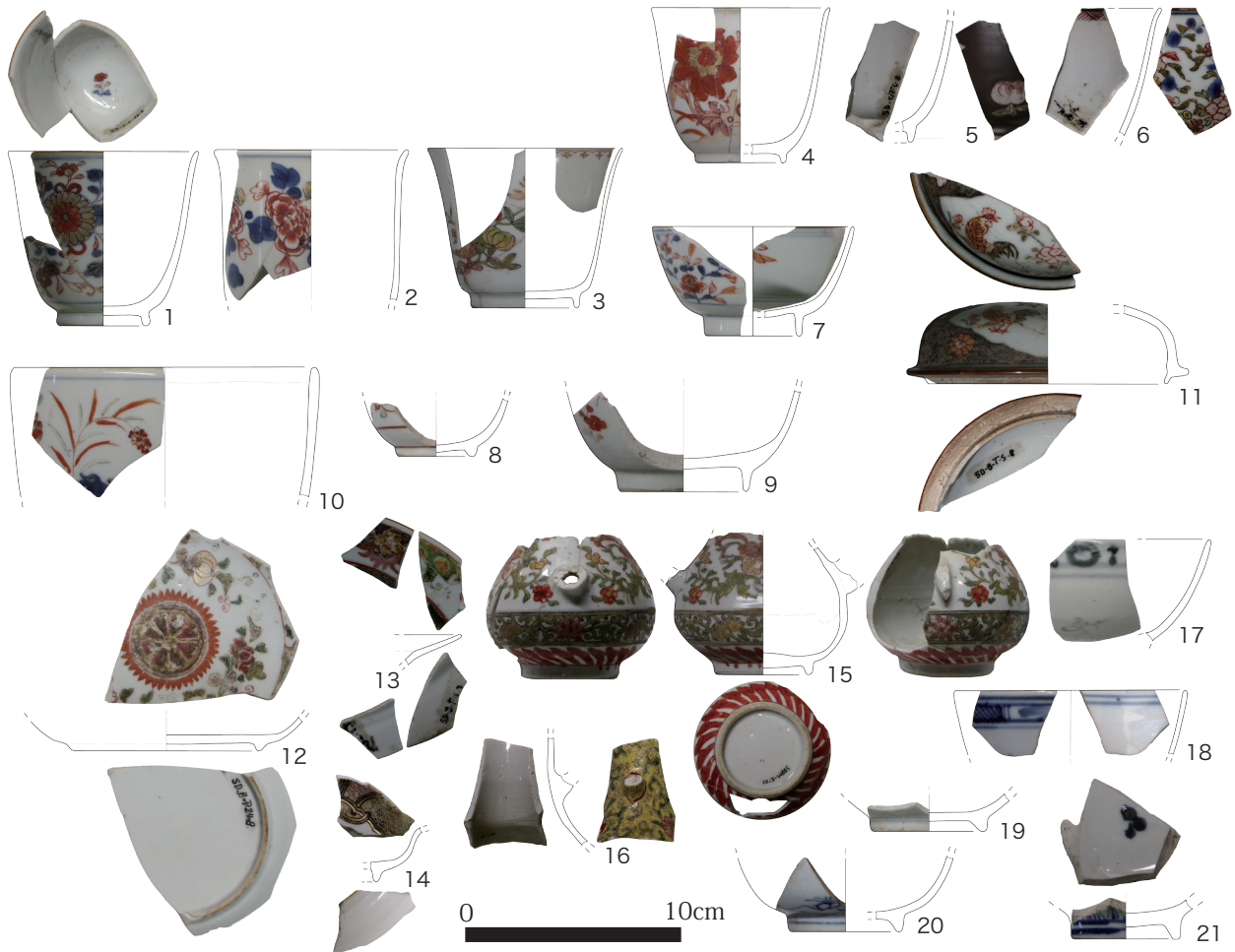


図9 サント・ドミンゴ修道院跡出土中国磁器（4）
 (Courtesy:El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo)

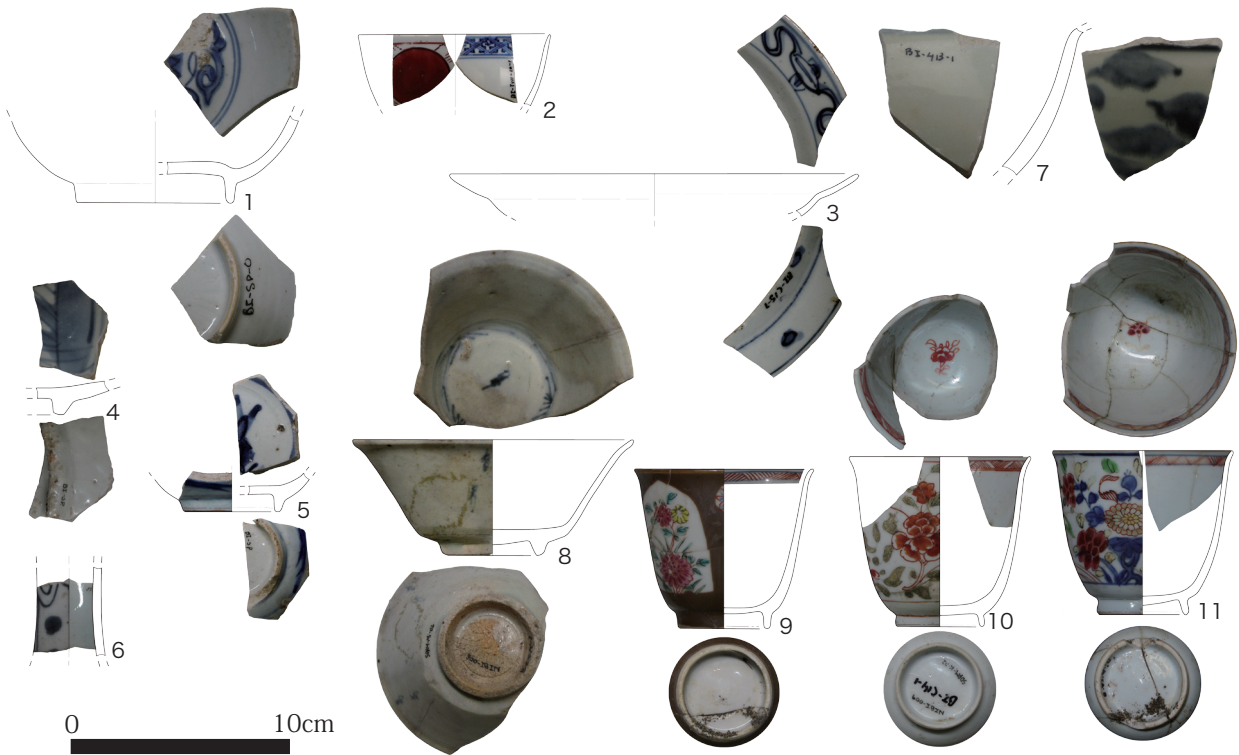


図10 ベアテリオ・インディアス遺跡出土中国磁器
 (Courtesy:El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo)

白抜きの窓絵に花文が上絵付けされている。その他、図化していないが、徳化窯系の白磁製品も 8 点ほど出土している。器種は碗および合子である。

IV 期

図 9-15 は色絵ティーポットである。景德鎮窯系である。花唐草文が描かれている。図 9-16 は黄地色絵の瓶である。景德鎮窯系である。厚く塗られた黄釉の地に嵌め込まれたように花唐草文が施されている。図 9-17～21 は徳化窯系の染付碗である。型成形によるものである。メキシコシティで同様の製品が出土している。

2. 日本磁器 (図 11)

アンティグアで出土している 30 数点の日本磁器は、いずれも 1650～1680 年代に有田で生産されたものである。(1) であげた III 期に該当する染付、色絵、瑠璃釉などがあり、器種は碗、皿、鉢 (あるいは瓶、壺) である。碗はチョコレートカップが多くを占め、皿は中皿、大皿などがある。以下、主なものについて紹介する。

図 11-1～7 は染付花虫文皿、いわゆる芙蓉手皿である。1660～1670 年代に有田内山地区で生産されたものである。ラテンアメリカではメキシコのメキシコシティ、オアハカ、ベラクルスで出土しており、ガレオン船で運ばれた日本磁器の主力製品である。図 11-8 は染付牡丹文皿である。有田内山で生産されたものであろう。底部にはハリ支え痕が 3 箇所見られる。類例がメキシコのヴィレイナト国立博物館に所蔵されている [Kuwayama 1997: p.51]。図 11-9, 10 は染付碗である。口縁が外側に反り、雷文が廻らされている。図 11-13～22 は染付チョコレートカップである。芥子文、草花文などがあり、「大明年製」の高台内銘をもつものもある。染付チョコレートカップはメキシコシティ、オアハカ、ハバナなどで出土している。1660～1680 年代に有田内山地区で生産されたものと思われる。図 11-23～25 は色絵チョコレートカップである。竹文、花文などがある。メキシコシティやオアハカで類例が出土している。1660～1680 年代に有田内山で焼かれた色絵素地に赤絵町で上絵付けされたものであろう。図 11-26 は瑠璃釉掛分チョコレートカップである。メキシコシティ、オアハカで類例が出土している。17 世紀後半に有田内山地区で生産されたものと思われる。図 11-27 は色絵鉢である。あるいは大瓶、蓋物の下部である可能性もある。17 世紀後半に有田で生産されたものである。

この他、実見していないが、サンフランシスコ修道院から出土している瑠璃釉掛分チョコレートカップもまた有田内山で生産されたものと思われる。

IV. 討論

— アンティグア・グアテマラ出土東洋磁器の特質 —

1. 産地と年代について

サント・ドミンゴ修道院跡やベアテリオ・インディアス遺跡から出土している東洋磁器の大半は中国磁器である。中国磁器の年代は 16 世紀後半から 18 世紀にかけてのものである。最も古いと考えられる製品は、I 期に含めた碗と大皿である。ガレオン貿易が開始された時期前後の製品であるが、量的には非常に少ない。量的に多いのは 16 世紀末～17 世紀前半、17 世紀末～18 世紀前半にかけてのものである。一方、近代以降の製品を除いて、最も新しい製品は IV 期に見られる景德鎮窯系の色絵製品と徳化窯系の型成形の碗である。仙芝祝寿文や梵字文、鋸歯状の花弁をもつ花唐草文など 18 世紀後半～19 世紀前半にかけてよく見られる製品は確認されていない。また、いわゆるウィロウパターンの製品も見られない。このことが 1773 年の大地震によって、アンティグアが壊滅したことと関わりをもつものかどうかは现阶段では不明である。メキシコシティでも同様の傾向が見られ、ガレオン船による陶磁器の輸入そのものが減少したことによる可能性も考えられるからである。1773 年以後のアンティグアにおける陶磁器需要については地元産の陶器の年代の検討も必要であろう。

生産地は全時代を通して、景德鎮系の製品が多いが、II 期については漳州窯系の製品が一定量見られる。III 期以降については、粗製の染付寿字散し文碗や徳化窯系の白磁製品や型打成形による染付碗などが見られるが、量は少ない。これらはいずれもメキシコシティでも確認されている種類のものである。東南アジアなどの地域のように IV 期になって、徳化窯など福建・広東系の製品が増大する傾向は見られない。全体としては、メキシコシティやオアハカなどで見られた傾向と同様である。

日本磁器の年代は 17 世紀後半に限られている。メキシコシティやオアハカ、ベラクルスの出土品に見られた 18 世紀前半の金襴手の製品は今回、確認できなかった。もちろん、今後、発見される可能性を否定するものではない。産地については全て有田産とみてよいと思う。特に内山地区で生産されたものが大半を占めている。この

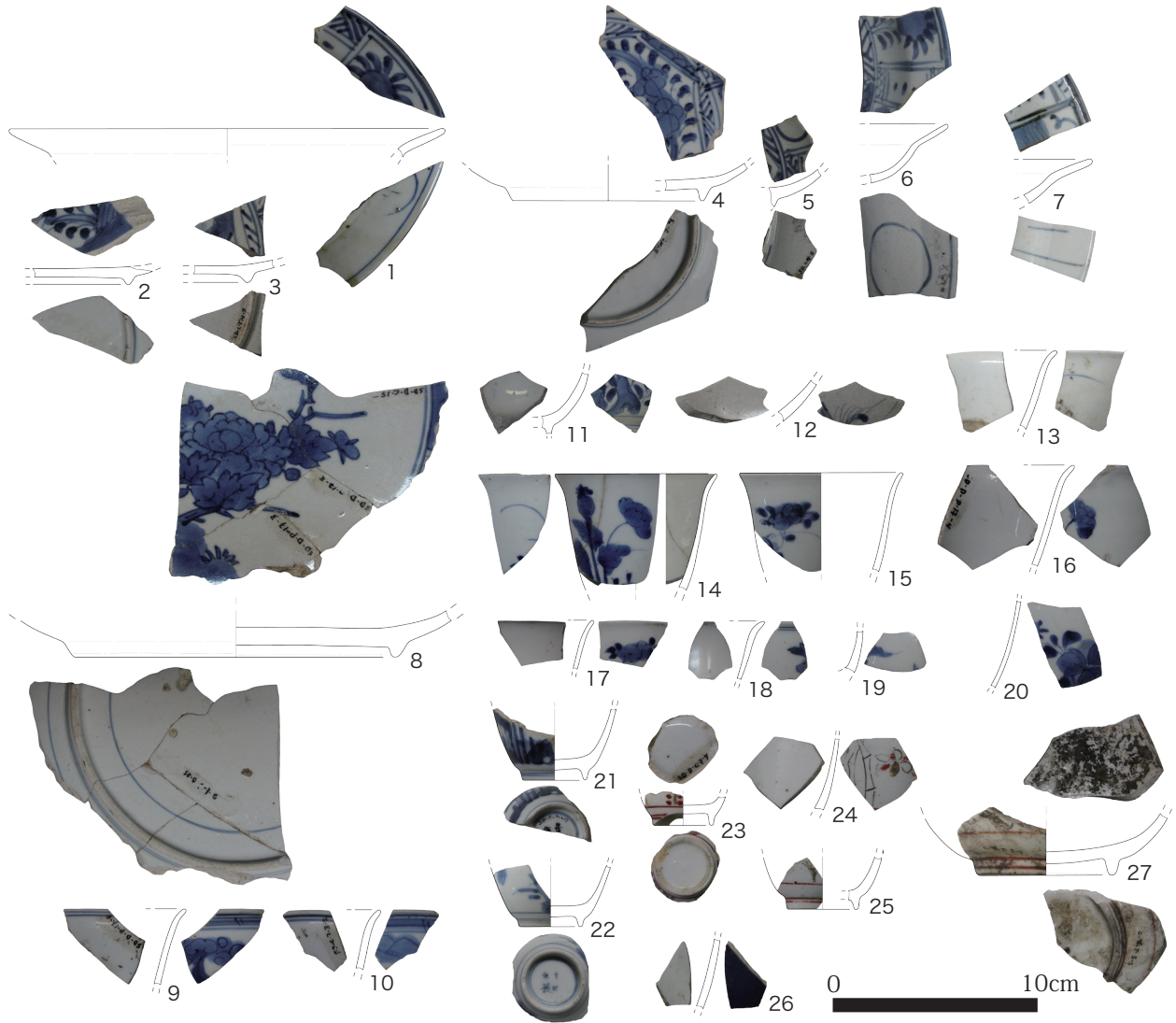


図 11 アンティグア出土日本磁器
(Courtesy:El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo)

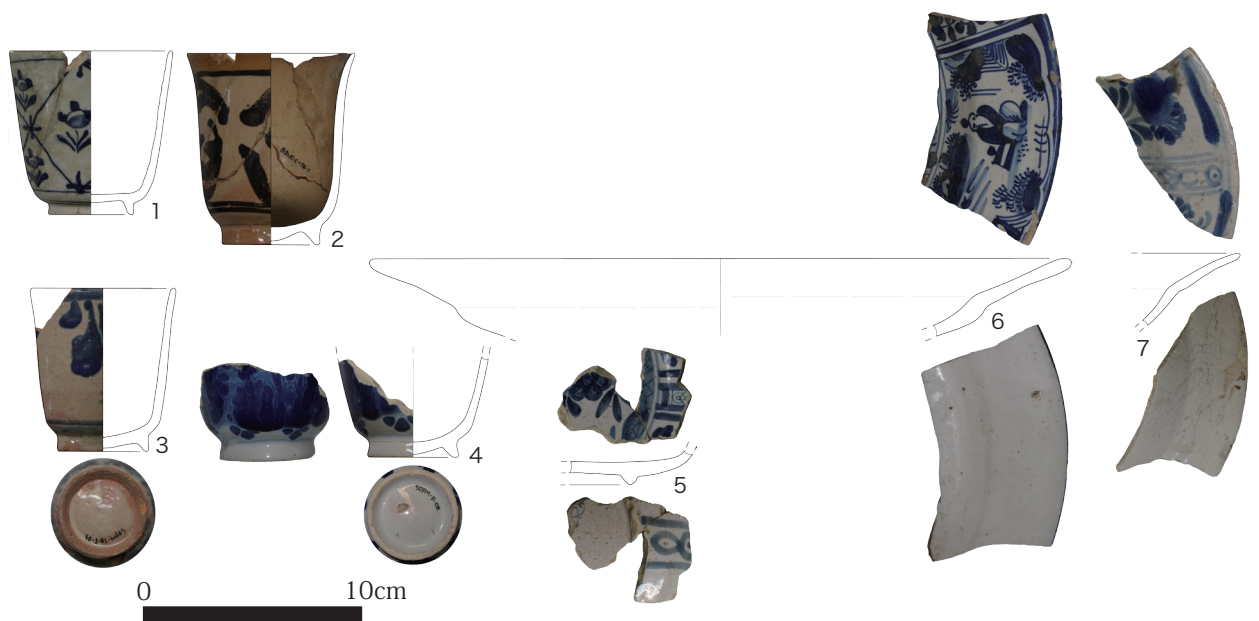


図 12 アンティグア出土ヨーロッパおよび中米産陶器
(Courtesy:El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo)

傾向も他のラテンアメリカで見られたものと同様である。これまでラテンアメリカで出土している近世の日本磁器の中で有田以外の製品はまだ確認していない。

2. 釉などの種類、器種について

中国磁器は染付が最も多く、色絵がそれに次ぐ。時期別に見ると、Ⅰ期・Ⅱ期はほとんどが染付製品であるが、Ⅲ期は色絵製品がかなりの割合を占めている。特にいわゆるチャイニーズイマリとよばれる染付と色絵を組み合わせた装飾の製品が目立つ。色釉について、青磁はほとんど見ないが、褐釉を掛け分けたバタヴィアンウェアとよばれるものは見られる。その他、徳化窯系の白磁が見られることは先に述べたとおりである。器種は、皿、碗、カップ、合子、蓋物、瓶、ティーポットなどがある。量的に少ないⅣ期を除いて、皿はⅠ～Ⅲ期を通じて見られる。また、Ⅲ期はチョコレートカップが染付、色絵を問わず、数多く見られる。

日本磁器も同様に大半が染付である。すでに述べたように他に瑠璃釉、色絵などがある。青磁釉の製品は確認されていない。器種は皿、碗、チョコレートカップなどである。皿は染付花虫文の芙蓉手皿が大半を占める。メキシコにおける傾向と同様である。

3. 陶磁器需要について

すでに述べたように、アンティグアから出土している東洋磁器の主体は中国磁器である。清朝による海禁政策下の一時期においてのみ、グアテマラへの日本磁器の輸入が一定量みられる。それではⅡ期の需要をそのまま日本磁器が受け継いでいるかどうかを見てみる。Ⅱ期の中国磁器は景德鎮窯系だけでなく、比較的質の劣る漳州窯系の磁器も見られたが、続くⅢ期に見られる日本磁器はいずれも比較的上質な有田産（特に有田内山）のものに限られ、有田以外の産地の品質の劣る製品はまだ確認されていない。アジア側の貿易拠点であるマニラ自体に有田内山以外の産地の日本磁器が持ち込まれていないわけではなく、マニラには有田内山以外の製品も相当量輸入されているし、マニラへの主力製品の一つは有田外山で生産された粗製の染付芙蓉手皿であった。つまり、Ⅱ期まではマニラとグアテマラとは東洋磁器に対して大きな需要の差がないが、Ⅲ期になるとメキシコやグアテマラでは需要が限定されてくるようである。

比較的質の劣る陶磁器への需要そのものが消失したと

は考えにくいので、Ⅱ期からⅢ期にかけて何らかの事情の変化があったと推測する。すなわち、陶磁器貿易量の縮小、現地産の陶器生産の拡大などが理由として考えられる。貿易量全体が制限されたり、他の貿易品の量の拡大等により、陶磁器貿易量が縮小したことによって品質の高い製品に限らざるをえなくなった可能性、あるいはプエブラ焼などの生産拡大によって需要がまかなえた可能性などである。プエブラ焼は17世紀後半から18世紀にかけて染付陶器などを量産し、新大陸で最も重要な陶業の中心地になっていったという（テレロス、モラレス2011）。すなわち、清朝の海禁政策によって、アジアからの陶磁器輸入が減少する中、陶磁器需要の高まりがアメリカ大陸内の陶業地を刺激したと考えられる。景德鎮産のような高品質の磁器の生産はできなかったため、その代わりに有田内山産の磁器が輸入されたが、比較的品質の劣る磁器については現地産などで代用がきいたことが考えられる。

東南アジアなどでは展海令以後、堰を切ったかのように徳化窯系など福建・広東系の磁器が急増する例が見られるが、メキシコやグアテマラではそのような傾向は見られない。その分の需要はプエブラ焼などの現地産やヨーロッパ産の陶器によって補われたと考える。

そうした中、少量見られるⅢ期の粗製の染付寿字散し文碗、Ⅳ期の型成形の染付碗などは特殊である。同時代の他の東洋磁器に比べて品質的に劣るものであり、積極的に商品として輸入されたとは考えにくいものである。メキシコシティでも確認されるため、単なる偶発的な理由で持ち込まれたものではないように思うが、量的には少なく商品というよりも乗組員の使用品であったり、人の移動に伴って運ばれたものであった可能性もあると思う。

おわりに—今後の研究課題—

今後の研究課題について、いくつか述べる。アンティグアあるいはグアテマラに限らず、メキシコなどその他のラテンアメリカ地域についても共通して言えることであるが、まず課題の一つはラテンアメリカの陶磁器需要全体の中での東洋磁器の位置づけである。過去、数度にわたってメキシコやグアテマラの出土東洋磁器の調査を行った結果、中米出土の東洋磁器の特質や傾向、中国磁器と日本磁器の関係などについては少しずつ明らかにできたと思う。一方、メキシコやグアテマラで出土する施

釉陶磁器は東洋磁器だけではなく、現地産やヨーロッパ産のものが大量に出土する。これらは東洋磁器と需要が重複する部分があり、その相互関係を知ることは重要な課題になると思う。また、東洋磁器が現地の陶器生産に与えた影響を考えることも必要であろう。

次に中国磁器や日本磁器以外の東洋の陶磁器に関する課題である。例えば 1600 年にマニラ沖で沈んだガレオン船サンディエゴ号では、中国南部産の陶器壺、タイの焼締大壺、黒褐釉壺、ミャンマーの黒褐釉壺などの東南アジア産の陶器壺が多数発見されている。もちろん、これらの壺自体がメキシコやグアテマラで求められたわけではなく、内容物が商品であったわけであるが、その容器として太平洋を越えてアメリカ大陸にもたらされていた可能性は高いと思う。磁器のように抽出することが容易ではなく、初期分類も行われていない状態であろうが、非常に重要な作業になると思う。

最後に、アメリカ大陸を植民地としたのはスペインだけではない。ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスなどの諸国もまた植民地化の舞台とした。スペイン以外の諸国の植民地に持ち込まれる陶磁器は、ガレオン船による太平洋ルートではなく、本国のあるヨーロッパから大西洋ルートによるものである可能性が高い。輸入ルートの違いや地域の違いが出土陶磁器にどのように反映されるか興味深いテーマであると思う。

ラテンアメリカにおけるアジアの陶磁器に関する研究はまだまだこれからである。調査の度に新しい発見に出会える。今後、調査フィールドも中米だけでなく、南米やカリブ海周辺へと広げていきたいと考えている。

本研究は、公益財団法人三菱財団人文科学研究助成金および財団法人高梨学術奨励基金による平成 24 年度研究助成を受けて行った。

謝意

本研究については、多くの方々や機関のご協力を得ました。芳名を記して謝意としたい。

El Proyecto Arqueológico Hotel Museo Casa Santo Domingo, Ana Claudia, Santos Abigail Hernandez Martinez, Alex Urizar, Claudia Wolley、佐々木達夫、大橋康二、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学術研究センター、中村誠一、中村慎一、多々良穰(順不同、敬称略)

引用文献

- 桜井三枝子(編)『グアテマラを知るための 65 章』明石書店
エラディオ・テレロス・ロシオ・モラレス(野上建紀訳)2011
「カラック磁器デザインのマヨリカ・プエブラ染付」『金
沢大学考古学紀要』vol.32. 55-56 頁.
ジョージクワヤマ 2010「グアテマラのアウディエンシアの
日本磁器」『世界に輸出された肥前陶磁』九州近世陶磁
学会. 302-306 頁.
野上建紀 2010「一七世紀後半～一八世紀前半における肥前
磁器のアメリカ大陸への流通」『交通史研究』第 72.
1-23 頁.
碗礁一号水下考古隊編著 2006『東海平潭碗礁一号出水瓷器』
科学出版社.
C. L. van der Pijl-Ketel[ed.] 1982 *The Ceramic Load of the 'Witte
Leeuw'(1613)*, RIJK Museum Amsterdam.
Eladio Terreros, Rocío Morales S. 2011 Mayólica poblana azul sob
re blanco, con diseños de porcelana tipo Kraak 『金沢大学考
古学紀要』vol.32 51-54 頁.
Jean-Paul Desroches, Gabriel Casal, Frank Goddio 1996 *Treasures
of the SAN DIEGO*. National Museum of the Philippines.
Kuwayama, George 1997 *Chinese Ceramics in Colonial Mexico*.
Los Angeles County Museum.
Kuwayama, George 2000 Chinese Ceramics in Colonial Peru. *Orie
ntal Art*. vol.XLVI No.1: 2-15.
Kuwayama, George and Pasinski, Anthony 2002 Chinese Cerami
cs in the Audiencia of Guatemala. *Oriental Art*. vol.XLVIII
No.4 : 25-35.
Nguyen Dinh Chien 2002 *The Ca Mau Shipwreck 1723-1735*.
Romero, Luis A. 2007 La cerámica de importación de Santo Domi
ngo, *Antigua Guatemala*. En *XX Simposio de Investigaciones
Arqueológicas en Guatemala, 2006* (editado por J.P. Laporte,
B. Arroyo y H. Mejía), Museo Nacional de Arqueología y Etn
ología, Guatemala. (Versión digital): 1529-1545.